



Title	松山先生の講演を回想して
Author(s)	三輪, 時雄
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 34-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

御病氣勝で後半生を送られた先生を思ひ偲ぶと共に、先生の令夫人の御苦勞が思はれてならない。先生が病まれて數年間令夫人が髪を人並に結はれたことを知らなかつた。以て令夫人が萬事を忘れて先生の御看護に當られたことを察すべきである。先生が御病弱の御身をもつて榮ある博士號を得られる迄には涙なしには聞けぬ話の數々が令夫人についてあることと思ふが、此の數年間全くお宅の方へは訪問致さなかつた私は、何ふ機會もなかつた。何時か又訪れて備に承はつて次の機會に筆にしたいと念じてゐる。

先生の冥福を祈ると共に、令夫人の御自愛を祈つて擲筆する。

松山先生の講演を回想して

大阪工廠長 三 輪 時 雄

工廠職員一同の爲に儒教に關するお話を松山先生にお願いしたところ、快諾を得て愈々大正十四年十一月十三日に工廠内講堂に於て實施さるゝことゝなつた、表題は『儒教々義一斑』であつて極めて謹嚴なる態度を以て諄々として講演さるゝこと約二時間に及んだ、先づ『儒教』の定義より説き起して其

の經典としての論語の位置に及び儒教の非常に大切とするところは學問であるとなし其の學問の目的は有徳の君子と成るにありと斷じ之が教科としては畢竟文行忠信の四に出でることを述べ而して之に達する方法として孔子の採られたる各種の方法を詳説された。其の説かれたところは論語を主としてされたのであつたが該博なる學識と透徹したる考察とを以て縦横に引證し極めて明快に而も極めて平易に條理整然説明された所は誠に敬服に堪わざるものがあつた。實に論語二十篇を全部解體してばらくとし更に之を組織的に編組し換へて秩序的説明を加へたるか如きものであつて、此二十篇を十分に咀嚼消化するだけの胃腸——經學的哲學的大胃腸——を持つものでなくては到底能はさるものであることを想はしめた實際吾人此方面の初心者は一度や二度論語を讀んでも四書を讀んでも中々其の精神の中樞を捉へることは出来るものでない況んや『儒教の教義』といふ如き大なる問題が判るものでない。只華叢にでも入りたる如く美葩麗葢か雜然としてあるのを認めるのみで全体として体系を認めることは容易なことではない。所が今先生の講演に因りて吾人初心者の極めて明確に儒教教義の核心に觸れることが出来たのである。

此くの如き内容ある講演は素より先生の如き篤學の士に非さればなし能はさるものなることは申す迄もなきが其れよりも一層吾人の心に感せしめたるものは先生が如何にも儒教の教義其まゝを親しく體得し實踐しつゝある人なることを思はしめた點にある即先生は口舌上の師といふよりも寧ろ實行的

の師なることを思はしめた點にあつた。

講演終了後に於て職員共の感想を問ひしに、『誠に古の人格ある儒者を面のあたり見る心持し其の教を直接受けた感があつた今日迄聞きたる他の幾多の講演とは全く類を異にしありし』とは多くの一致したる答なりし實に先生の講演上の風貌は今尙は眼前に髣髴たるものがある。

其後講演を小冊子に印刷したるゆへ先生にも御所望の部數を差上げたき旨申上たる所、所要部數の申越ありしと共に意外にも之に對する代價をも御送付ありしは誠に恐縮したる次第であつた是れ亦高潔なる先生の人格の一端を見るに足るものと信ずる。

余は先生の講演に對し中心よりの謝意を表する爲め左の如き巴調一絶を花瓶に彫刻して捧呈した。

洙泗正源豈易求、涇渭渭濁共悠悠、

謝君珠貫暈分識、能使鍛鑄辨九流

詩は誠に拙いが其の時の所感を現はした積りである、所が先生よりの御返事の中に『特に瓊章一絶敢而淺學の當る所に無御座候得共永く紀念として寶重子孫に傳へ可申』の句ありて汗顔の至りに堪へなかつた次第であつた、併しこれも亦先生謙讓の徳の現はれとも思ふ次第であつた。

嗚呼先生逝て復た歸らず『儒教々義一斑』の小冊子遺響として篋底に鳴る、感慨何んぞ堪はん。